リー・ハント

## 1　ロビン・フッドの子ども時代

銀色の雨あがり　街道はまだ濡れていても
　田舎家の戸口の前の小石は
すっかり乾(かわ)いている
　まだそんな心地よい季節のこと

緑の葉はより緑の色濃く　5
　ツグミはふたたび歌いだし
その大きく愉(たの)し気なさえずりは
　青く眩い真昼の空に響き渡った

ロビンの母親は外を眺めてこう言った
　「髪が濡れるからといって　10
こんな日に家にこもって
　ガメリン伯父さんの
お見舞いに行かないなんて
　いけないことだわ」

全くだと思ったロビンが飛び上がった時には　15
　すでに母親の外衣(コート)を掴んでいた
二人がようやく振り返ってみたときには
　賑やかなロクスリーの町はもう見えなかった

ロビンは優しく礼儀正しく
　そのうえ勇敢な少年だった　20
母親の誇りという言葉では
　言い尽くせないほどだった

前髪はその利発そうな額で
　きれいに切り揃えられていたが
紅潮した頬の上には　25
　ところどころ巻き毛がかかっていた

気高いガメリン伯父さんもまた
　ロビンをたいそう愛していた
ロビンの母親も知るように

　常々　ロビンを跡継ぎにと語っていた　30

ガメリンの目は日に日に霞んでいたが
　ロビンの姿を見れば輝きを取り戻し
真っ白い髪の隙間から赤みのさす皺を寄せて
　ロビンに微笑(ほほえ)むのだった

ロビンはガメリンの目の前で　35
　レスリングでも　かけっこでも　弓の腕比べでも
遊び仲間たちを必ず打ち負かして見せてきたが
　本当は勝っても負けても気にはしていなかった

仲間の中でもロビンは一番陽気な少年
　古い兜(かぶと)を面白半分に叩いてまわった　40
ガメリンがその音について尋ねれば
　「恐れながら　ロビン様の仕業でございます」

しかし老ガメリンが静かにしてほしいときには
　決まってガメリンの膝の側に座り
仲間の中でも一番もの静かになって　45
　ひと言も発しないのであった

ロビンとその母親が
　勇敢な老ガメリンの館にやって来ると
いつでも腕比べやゲームに興(きょう)じ
　みな一日中お祭り騒ぎ　50
たとえ召使たちが薬を出し忘れても
　だれも咎められることはなかった

さて　道を曲がれば
　カラスの鳴き声が聞こえてくる
そして見えてくるのはあの懐かしい館(やかた)　55
　優しく迎えてくれるあの館(やかた)

互いに顔を見合わせて
　ロビンと母親は笑い合った
「母さん　いつものように
　僕が伯父さんの部屋の窓を叩くよ」　60

ロビンは小石をいくつか拾って走り出した
　そして高く高く跳びあがっては

コツンコツンと窓に当てた
ところが顔を出したのは白髪の優しい伯父さんではなく
　太った修道士だった　65

「こら」と太った修道士が怒って言った
　「窓に向かって石を投げるとは何事だ」
だが幼いロビンの眼を見た途端　修道士は言った
　「坊主　表にまわれ

そうすれば全てを教えてやろう」　70
　「全てを教えるだって」とロビンは思った
ロビンと母親はおとなしく従ったが
　母親はひどく胸騒ぎを覚えていた

修道士は扉の内側に立ち
　慇懃(いんぎん)にこう言った　75
「残念だが　偉大な騎士
　ガメリン・ド・ヴィアはもういない」

「ガメリン・ド・ヴィアは死んだ
　昨晩　容体が急変したのだ」
すると母親がこう言った　80
　「その悲しい知らせをこの目で確かめさせて」

「偉大なガメリン・ド・ヴィアは死んだ
　我らを正式な相続人にしてな」
母親は修道士の言葉に立ち止まることなく
　泣きながら階段を上(のぼ)っていった　85

ロビンと母親は手に手を取って
　泣きながら階段を上(のぼ)った
そして冷たくなって無言でベッドに横たわる
　領主ガメリンのもとにたどり着いた

母親はガメリンの手を握り　90
　瞼(まぶた)を閉じたその死に顔を見つめた
ロビンと母親はひどく泣いた
　ガメリンに置き去りにされた子どものように

「すぐに戻ります　修道院長
　戻ってきますとも　もちろんのこと　95

経かたびらに包まれた
　大切な兄上に会うために

そしてここにとどまります
　女の涙にかけて　去ることは罪ですから
ヴィア家のご先祖様たちと共に墓に眠る　100
　気高いガメリンに会うために」

母親は張り裂けそうな悲しみを胸に
　新鮮で穏やかな空気を求めて外に出た
そして館(やかた)で会った修道院長について
　ロビンにすべてを話して聞かせた　105

ガメリン伯父さんが薄れゆく意識の中で
　どれほど心乱されたことか
卑怯でずる賢い修道士たちに全財産奪われて
　ロビンとその母親に何も残せないことを思って

ヴィア修道院の修道士たちを除き　110
　誰もが深い悲しみに打ちひしがれた
静かにうたう聖歌隊に囲まれて
　ビロードの布が棺(ひつぎ)から外されたとき

誰もがそうであるように　深い悲しみに包まれる中
　「塵(ちり)は塵(ちり)に」「我らが友は旅立った」と　115
みながうたう言葉に母親は身を震わせて悲しんだが
　ロビンはみなとは違う思いを抱いていた

その日の夜
　二人はロクスリーの町へ戻っていったが
母親は悲しみのあまり口もきけず　120
　ロビンはただ俯(うつむ)いているだけだった

二人はただひたすら長い道のりを歩いた
　ロビンは母親の側を歩き続けた
母親は弱々しい笑みを浮かべ
　何をそんなに考え込んでいるのかと息子に尋ねた　125

幼いロビンは熱のこもった声で言った
　「僕　考えてたんだ
僕が王様だったら

奴らの悪だくみを暴いてやるのに」

母親は嬉し涙を目に浮かべ　130
何度も何度も息子にキスをした
「私の可愛いロビン坊や　きっとなれるわ
あなたなら　民に愛される王様に」

（宮原牧子訳）